

Living the Lotus 12

Buddhism in Everyday Life

2024
VOL. 231



2024年 お会式・一乗まつりに海外会員が参加
笑顔と感謝の心で教えを世界に

Living the Lotus Vol. 231 (December 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 赤川 恵一
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の経典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。



出会いが育てる
——敬する心・恥じる心②

庭野日鑛
立正佼成会会長

仏の教えを伝える「出会い」を

平安時代の僧侶で、歌人でもある西行法師に「秋の野のくさの葉ごとにおく露をあつめば蓮の池たたふべし」という歌があります。晩秋から冬にかけてでしょうが、紅葉した葉が朝露に濡れて……そうした美しい情景を描いた歌です。ただ、ふつうは儂く消えるものの象徴とされる朝露を、西行はそれを集めれば清らかな露の満ちる蓮の池になると詠っています。じつは、自然界の妙趣を詠みこんだようでいて、この歌は法華経・化城論品の一節「願わくは此の功德を以て 普く一切に及ぼし 我等と衆生と 皆共に仏道を成ぜん」に重ねたもので、露とは仏性のことなのです。

西行が生きた平安時代は、災害や悪疫、戦乱や飢饉などがつづいて苦しむ人が数多くいた時代です。西行はそのような世を憂い、困窮し苦難に耐え忍ぶ人を一人残らず救いたいと願ったのでしょう。そして、その時代から約九百年がすぎたいまも、この世の様相の根本に大きな違いはないように私の目には映ります。その意味では、仏性にめざめた多くの人であふれる蓮池のように美しい世の中にしたいと、いまも、そして世界中のだれもが願っているはずです。

そのために私たちにできることといえば、一人ひとりが自身の仏性を自覚したうえで、苦しむ人に寄り添い、かかわるなかで、みんなが人を敬して和する世界をつくるよう努めることです。別言すれば、布教伝道という「出会い」が、いまはこれまで以上に求められているということです。

仏性の光り輝く蓮池に

ところで、敬^{うやま}う心が生まれるとおのずと恥^はじる心が起きると前号で申しましたが、私にも思いがけず「敬と恥」について学ぶことになった、苦^{にが}くて有^あり難^{がた}い体験があります。

大学三年の夏。当時、通っていた剣道の道場（および師匠のお宅）で二か月間、泊まりこみの修業をすることになったのですが、自ら申し出たのにもかかわらず、一か月もすると稽古^{けいこ}と掃除などの用事に疲れ果て、私は逃げ帰ってしまったのです。翌日、わが家^かに駆けつけた師匠の中村^{とうきち}藤吉先生から、家^{うち}じゅうに響きわたる声で「君はいま、うちの子も同然だ。さあ、来い」と一喝^{いっかつ}され、私が連れ戻されたのは当然のことです。本気で私を叱^{しか}ってくださった師匠には、私はいまも深い敬意と感謝を覚えますが、同時に、当時は感情的になって「なにくそ」と反発^{いだ}心を抱いたことも記憶しています。向上する意識^{とぼ}が乏しいと、反省よりも感情が先立って、そうした恥知らずな気持ちが起きるのかもしれない。

ただ、その「なにくそ」が「このままではいけない」という向上をめざす動機づけにもなります。仏性と同じく私たちに具^{そな}わっている恥じる心が発動し、私の場合でいえば、信頼を回復しようと心をあらためることができたのです。

信仰生活における懺悔^{ざんげ}が、人間的な成長を考えるうえで大事なポイントになることと、それは一緒だと思います。

出会いというふれあいのなかでこそ、だれにも具わっている敬する心や恥じる心はめざまします。本会の手どりやお導きの修行にも、自他のそうした心を育む大切な意義があるのです。まだまだ感染症の拡大には注意を払いつつも、周囲に悩んでいる人や困っている人がいたら手を差し伸べ、その出会いを機^きに仏縁^{ぶつえん}を広げて、地域社会を仏性の光り輝く蓮池というオアシスにする役割が、私たちにはあるのだと思います。それを忘れないよう、私たちは日々の読経^{どきょう}供養^{くよう}で先の経文をかみしめ、「みんなが仏性の自覚^{せいがん}に立って幸せを感じられる世界を築こう」と誓願するのです。

その最初の一步は、それぞれの家庭や職場、地域におけるあいさつと思いやりです。さて、この一年をふり返って、みなさんはどのような「自分」だったでしょうか――。

（『俊成』2024年12月号）



無常を自覚し、今を精いっぱい生きる —— それこそが息子へのいちばんの回向 イギリス・ロンドンセンター タジャーナ・オピア

立正佼成会ロンドンセンターには、いつごろ、どのような経緯で入会されたのですか？

私が立正佼成会に入会したのは2023年5月のことです。その頃、自宅の近く、あるいはオンラインで参加できる仏教センターをインターネットで探していたところ、立正佼成会ロンドンセンターのウェブサイトを見つけました。最初の数カ月間はEメールでメールマガジンを読んでいたのですが、ある時、「あなたも根本仏教の勉強会に参加しませんか」という告知を目にしたのです。その後、細谷恭一郎ロンドンセンター長さんに直接連絡をすると、私が勉強会に参加することをとても喜んでくれました。そして、オンラインで初めて対面した細谷センター長さんは、心優しく穏やかな人柄という印象を受け、勉強会も非常に興味深い内容でした。その日は土曜日で、細谷センター長さんが「明日のサンデーサービス(日曜礼拝)にもぜひ来てください」とお誘いくださったので、私は喜んで参加しました。

サンデーサービスではロンドンセンターのたくさんの会員さんとお会いしました。皆さん、笑顔がとても素敵な優しい方々ばかりで、初対面の私を心から歓迎してくれました。その後、『経典』を読誦するなど、私にとってはすべてが初めての経験でした。そのためサンガの皆さんは私のそばに来て、「これはこうするんだよ」とか「これにはこういう意味があるんだよ」と付きっきりで、いろいろなことを



ロンドンセンターの会員宅のご宝前の前で



タジャーナ・オピアさん

いねいに教えてくださいました。以後、私は毎週のサンデーサービスを楽しみにするようになり、仏さまの教えを学びながら、少しでも自分が成長できるよう努力を続けています。今は立正佼成会のサンガの一員になれたことに感謝するとともに、幸せを感じています。

ロンドンセンターで仏教を学び、実践されて約1年半が経つわけですが、その間、教えによって気づきを得た体験があれば教えてください。

それを言葉にして表現することはとても難しいのですが、実は2020年9月に心を病んでいた息子が、21歳の若さで突然自ら命を絶ってしまったのです。うつ病で苦しんでいた息子を、私は救うことができませんでした。息子を失ったショックと喪失感に苛まされ、私は《どうして息子の力になれなかったのか……》と何度も何度も自分の無力さを責めました。また、《もっとああしてあげればよかった……何かできることがあったのではないかと……》と後悔と



無念さの感情がわき起こりました。そして、《会いたい……もう一度愛する息子に会って抱きしめたい》と毎日のように涙が枯れるまで泣き続け、その日一日が暮れていく。そんな深い悲しみとつらい日々が何年にもわたって続きました。

息子を失って約3年の間、私は死という冷厳な事実をなかなか受け入れることができませんでした。命あるものは、いつか必ず死を迎える。そう頭ではわかっている、息子との永遠の別れは考えるだけで胸が張り裂けそうでした。そんな私に大きな転機が訪れました。細谷センター長さんから根本仏教を学び、またサンガの多くの皆さんに励まされながら、私はさまざまな気づきを得て、しだいに気持ちが楽になっていきました。

三法印の諸行無常では「すべてのものは常に変化している」と教えていただきました。人生に生じる苦しみや悲しみ、喜びや楽しみは、すべて一時的なものであり、いつまでも続くわけではないことを深く知りました。言い換えれば、私たちは毎日、無常の中に生きているということです。そして無常を自覚することによって、変化に抗うことなく、悲しみにもとらわれることなく、目の前の現実をありのままに受け入れることが大切だと気づいたのです。仏さまの教えに出遇って約1年半、私は少しずつ息子の死という



ロンドンセンターでの読経供養の様子(前列右側がタジャーナさん)
事実と向き合い、それを受け入れるところから、悲しみや苦しみを乗り越えられると心を切り替えることができたのです。

また、今年7月の盂蘭盆会、9月の息子の祥月命日の法要がロンドンセンターで営まれ、多くの会員さんが参加されました。私はこの法要を通じて息子との霊的なつながりを強く意識し、息子が私の心の中で生きていることを実感しました。そして、私自身が日々、無常を自覚し、今を精いっぱい生きていく——それこそが人生をより豊かに積極的に歩むことになり、息子へのいちばんの回向になると受け止めさせていただいたのです。

法華経の中で好きな言葉や心に留めている経文はありますか？

私は佼成会の会員になって日が浅く、しっかり法華経を学んだわけではないので特にこの経文と言うのは難しいですね。ただ今年9月の息子の祥月命日の法要の時、ある会員さんから「法華経の25番(観世音菩薩普門品)を上げるといいよ」と言われたことが印象に残りました。そう言われて、一心に観世音菩薩の智慧と慈悲の心を信じて、このお経を上げると、なぜか心地よくなり、安心感を覚えました。それもきっと観世音菩薩の功德ではないかと思っています。今はこの品が大好きだし、これから私にとって大切なお経になると信じています。



ロンドンセンターで鐘のお役を務めるタジャーナさん

Interview

立正佼成会の教えで大切にしている言葉や実践はありますか？

会長先生は日ごろから、私たち会員に対して「心田を耕す」ことの大切さをくり返し教えてくださっています。ですから私はこのお言葉をいつも心に刻み、日々、心の田をやらわかく耕す言葉や行ないを心がけ、自分の仏性を掘り起こせるように努力させていただいています。

立正佼成会のどういうところに魅力を感じていますか？

立正佼成会に入る前、私は仏教書を読んだり、チベット仏教の団体に行ったりしましたが、どうも自分には合わない、何かしっくりこなかったんですね。でも、ロンドンセンターを訪れた時、「ここは私が最も安らげる居場所だ」と、まるで自分の故郷に帰ってきたような不思議な感覚がありました。このセンターで細谷センター長さんから根本仏教や法華経を学び、法座修行で会員の皆さんの考え方や経験を共有しながら自分を内省することによって、よりよ

い人間に向上できることが最大の魅力だと思っています。

最後に今後の修行目標、また将来の夢を聞かせてください。

私のこれからの目標は、教えをもっと深く学び、いろいろな修行をさせていただき、サンガの皆さんと共に仏教の智慧を身につけることです。そして、いつか日本の立正佼成会の本部を訪れ、できれば会長先生にお会いして、お言葉をいただきたいという大きな夢を抱いています。そのためにも今まで以上に教えを学び、実践して人格を磨き、毎日を穏やかな心で生きていきたいと思っています。これから歩む人生において、たとえどんな苦難があっても、それを成長と学びの機会として受け止められるよう、仏さまの智慧を身につけ、周囲の人たちの人生に良い影響を与えられるような自分になれるように精進していきたいと願っています。



2024年7月13日、ロンドンセンターで行なわれた盂蘭盆会式典の終了後にサンガの仲間と（前列中央がタジャーナさん、サンガの仲間の赤ちゃんをひざに乗せて）

まんが立正佼成会入門

教団の行事

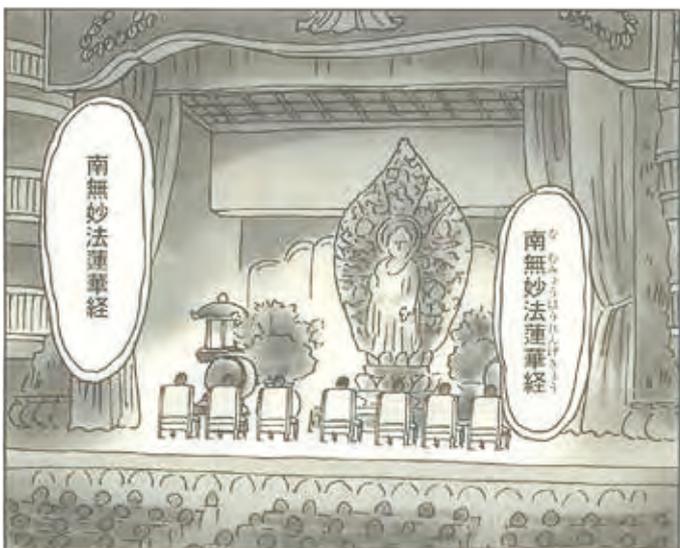
盂蘭盆会

7月13日から16日、および8月13日から16日をお盆（盂蘭盆）といいます。

お盆とは、ご先祖さまの霊（精霊）をこの世にお招きして供養するとともに、いっしょに過ごす風習のことです。

地域によって供養の仕方はさまざまですが、ご先祖さまのおかげでいまの自分があるのですから、感謝をささげる日として大切にしたい行事です。

立正佼成会でも毎年7月中旬に「盂蘭盆会」をいとなみ、読経供養を行ないます。



豆知識

お釈迦さまの十大弟子の一人、目連は苦に満ちた餓鬼界におちている亡き母を救うため、師の教えにしたがって七月十五日に僧たちへ布施行をしたところ、母は安らかな天上界にのぼっていった。これが盂蘭盆会のいわれだ。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。
<https://www.koseishop.com/>

脇祖さま報恩会

開祖さまとともに立正佼成会を創立した脇祖さまは、1957年（昭和32年）9月10日、満67歳で遷化しました。

時にはやさしく、時にはきびしくという「嚴愛の二法」の慈悲行で、会員を幸せの道に導いた脇祖さ

ま。いまでも会員からは「慈母」としてわれています。

毎年9月10日は、脇祖さまが歩んだ布教一筋の「慈悲の生涯」をふり返り、その足跡をしのぶとともに、会員一人ひとりが脇祖さまの心を実践する誓いを立てる日でもあります。



豆知識

慈悲という言葉は「慈」と「悲」の二つの語からなる。慈とは、自分の人生が他の人の人生を幸福にするようなものでありたいと願う心。悲とは、自分の行ないが他の人の苦しみをのぞくはたらきをするようにと願う心。



仏さまに生かされて

生かされている喜びを伝える

立正佼成会開祖 庭野日敬



「仏さまに生かされている」ことを常に味わういちばんの方法は、毎日のご供養をすることです。朝な夕なに経典を読誦させていただくと、そのたびに「仏さまに生かされている」という、喜びと感謝がこみあげてきます。

「仏さまに生かされている」という喜びがあれば、まわりの人に話をするのでも、柔和な態度で接するようになります。相手が悩んでいるようなときは、「こうすればよくなりますよ」「仏さまの教えはこうですよ」と、教えてあげることもできます。そして、自分が生かされていることを自覚できていない人に、「あなたは、仏さまに生かされているのですよ」と、目を開いてあげることができるのです。それが、「仏さまに生かされている」私たちの役目であり、また修行であるということです。

私は折にふれ、各地の教会にお参りさせていただきます。どこでも大勢の会員さんが大喜びで迎えてくださいますが、そんなとき私は、「仏さまに生かされている人が、こんなにたくさんいる」という感激でいっぱいになるのです。

この「仏さまに生かされている」という喜びは、かみしめればかみしめるほど、行じれば行じるほど、大きくふくらんでいくのです。みなさんも、「仏さまに生かされている」という喜びを、声を大にしてまわりの人たちにお伝えしてってください。

Director's Column

年の瀬の誓い

国際伝道部長
赤川恵一

皆さん、こんにちは。師走を迎え、今年も冷たい北風の季節がやってきました。東京でも朝晩の寒さが厳しく感じられ、つい数か月前のうだるような猛暑の毎日がまるで嘘のようです。読者の皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

さて、会長先生からは、先月に続き「敬する心と恥じる心」の大切さについてご指導をいただきました。人さまの姿に自分にはない優れた点を見出し、至らない自分を恥じる心を向上心につなげていくことが大事であること、そのうえで一人ひとりが自身の仏性に目覚め、苦しむ人に寄り添い、人と人とが敬し合う蓮池のような美しい世界をつくっていく努力が、これまで以上に私たちに求められていることを教えてくださいました。

私たちには本来、仏さまと同じ智慧や徳相が具わっているにもかかわらず、他人と自分を比較して卑屈な気持ちになったり、劣等感の裏返しから驕慢な心を暴走させて、都合の悪い現実から目を背けたりしてしまいがちです。心の弱さが私たちをそのような衝動に駆り立てるのでしょう。

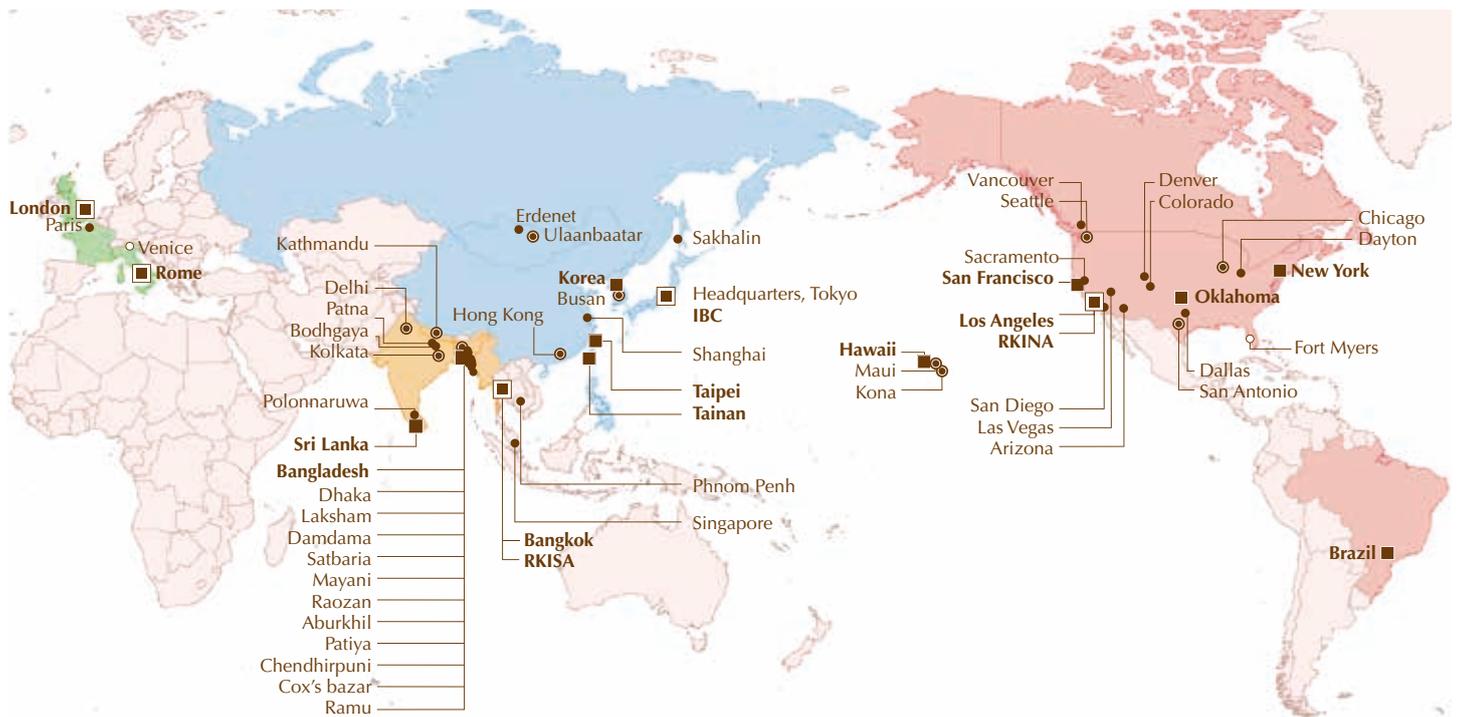
私たちは佼成会に入会した時から「質直意柔軟・謙虚・下がる心」を教えていただいております。そうした教えをしっかりと実践し、心も体も健康になっていこうと、年の瀬に改めて精進をお誓いさせていただきました。



2024年10月27日、大聖堂で行なわれた教師授与式のあと海外教会の拝受者と（最前列右端が赤川部長）



🌸 *A Global Buddhist Movement* 🌸



Information about local Dharma centers

